

英語教育の新たな視点*

細川博文

0. はじめに

文部科学省は2003年3月に「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」を発表した。その中で中学高校の英語教員を対象に、5年間にわたり集中的な教員研修を行うことを明らかにした。筆者は本年7月と8月に山口県教育委員会の依頼で、「English Communication Grammar」講座を担当した。これは教員の英語力向上を目指したスキル・クリニックで、2時間半の講座を全て英語で行うことが求められた。本稿では筆者が担当した教員研修の授業内容を紹介しながら、今後の教員養成にどのような視点が必要であるか考察する。

1. 英語が使える日本人の戦略構想

2002年7月に文部科学省は「英語が使える日本人」の戦略構想」を作成した。そして翌年3月には具体的な実施内容を盛り込んだ行動計画を発表した。行動計画は「英語が使える日本人」育成の目標」と「教育改善のためのアクションプラン」から構成されている。

育成の目標では、日本人に求められる英語力が示された点が注目される。目標は国民全体に求められる英語力と専門分野および国際社会で活躍する人材に求められる英語力を区別して設定している。前者は、中学・高校を卒業

して「英語でコミュニケーションできる」能力（具体的には中学で英検3級、高校で英検準2級～2級程度）を、後者は「仕事で英語が使える」能力を求めている。後者の能力がどの程度のものであるかは各大学で設定するように記載されているが、多くの大学が評価の指針としてTOEFL・TOEICテストを使うと考えられる。

このような目標を達成するためのアクションプランとして、7項目があげられている。①授業の改善、②指導力向上及び指導体制の充実、③学習者の学習意欲向上、④入試評価の改善、⑤小学校への英会話活動支援、⑥国語力向上、⑦実践的研究の推進である。本年度から実施に移された英語教員の集中的研修は項目②の一部であり、今後5年間で英語教員全員を対象に実施するものである。教員に求められるコミュニケーション能力の数値目標として、英検準1級・TOEFL 550点・TOEIC 730点が設定された。TOEFLとTOEICの点数上の相関関係は公式に認められていないが、指導者としてはこの程度の英語力が必要であるということであろう。今後は高度なコミュニケーション能力およびコミュニカティブ・アプローチに基づいた指導力がこれまで以上に教員に求められるであろう。

戦略構想は走り出したばかりで、問題が山積みしている。英語教育が総合的に検討され、具体的な改善策が示された点は一步前進と言えるが、国民全体に求められる能力まで到達させるのは至難の業であろう。確かにグローバル化が進み、物理的な移動が世界規模で行われるようになった。またインターネットの普及は情報の移動を加速化させ、情報・知識の獲得が国の経済に影響を及ぼすまでに至った。それでも、日本語でことたれる日常生活が保証されている以上、英語の習得は容易ではない。戦略構想は、教育の場として小学校から大学まで、また学生の学習意欲向上から教師の指導力向上まで教育問題を包括的に取り上げた点でこれまでの提案と異なる。体系的な取り組みの重要性が初めて認識されたことを、とりあえず積極的に評価したい。

2. 教員研修

文部科学省は英語教員研修の指針を示すため、「英語教員研修ガイドブック」を作成し教育委員会及び研修を担当する講師に配布した。ガイドブックには次の7つの研修内容が提案されている。

Type A : Basic Skills Clinics (教員の英語力向上を目指したもの)

1. Pronunciation
2. English Communication Grammar

Type B : Teaching Skills Development (英語指導力の向上を目指したもの)

1. Vocabulary & Grammar Teaching
2. Listening Practice
3. Speaking Practice
4. Reading Practice
5. Writing Practice
6. Diagnosing and Testing

Type C : Project Works (具体的な英語教育課題に対する取り組み)

1. How to motivate learners
2. Integrating the Four Skills
3. Classroom-oriented Research (Action Research)

Type D : Workshops and Cultural Experiences

(授業実践の向上を目指したもの)

1. Communication Activities (1)
2. Communication Activities (2)
3. Communication Activities (3)

Type E: Special Lectures (特別講演)

Type F: Presentation of 'My Special Ideas on Teaching'

(教育実践に関するアイデアの共有)

Type G: Elective Courses (相互アドバイザー制による課題学習)

筆者が担当の依頼を受けたのは、Type A の「English Communication Grammar」であった。これは英語教員自身の英語力を向上させるもので、特にコミュニケーションに必要な文法力の育成に焦点が当てられた。山口県の場合、講座は1回2時間半(150分)で、午前と午後の2回にわたって2日間実施された。

担当した講座の目的は、教員が英語の授業を英語で行うことができる力を育成することにあつた。この目的を達成させるために、筆者は「知識スキーマ」と「言語スキーマ」の2点に注目した。ここでいうスキーマとは、我々が所有している情報体系(知識体系)のことである。我々の知識はランダムに記憶されているのではなく、具体的なレベルから抽象的なレベルに階層構造をなし、ネットワークを形成している。語彙・文法・音声知識等は雑把に言って「言語スキーマ」に属し、その他の一般常識・社会知識は「知識スキーマ」に属する。文法知識や音声知識は有限個の規則に支配された閉じた体系を構成するのに対し、語彙やその他の一般知識は百科辞典的な開いた体系を作っている。

英語教育はともすれば「言語スキーマ」に偏った指導になりがちであるが、「知識スキーマ」も習得に大きな役割を果たしている。上級レベルの学習者でも、内容次第で英語の理解度がかなり落ちることがある。「聞き取れない」とか「単語の意味が分からない」というのは異なる問題が学習者の理解を阻んでいる。つまり、話される内容に対して十分な知識がないために理解できないのである。この場合は、「言語スキーマ」より「知識スキーマ」の方に問題があると言えるだろう。

今回の講座では、「知識スキーマ」のテーマとして世界語としての英語を

取り上げた。英語の使用人口を見ると、母語話者より第2言語・外国語として英語を使う話者の方が多いことがわかる。中学高校の6年間の英語授業で、こうした事実にあふれることはまれである。実際、英語教員自身がこのような事実を把握していない場合もある。また、母語としての英語に絞っても、イギリス英語とアメリカ英語で語彙・発音・用法がどのように異なるか学習する機会はあまりない。英語教育の新たな視点の1つは、英語を世界言語として捉えることである。

もう1点は、ことばと認識の関係を捉える視点である。英語教育と関連分野、特に心理学・言語学の歴史を振り返ると、20世紀前半の教授法は行動主義心理学と構造主義言語学に立脚していたことが分かる。具体的には、訳読に頼らず対象言語のみを使って学習する Direct Method が生まれ、続いて文法構造の理解を学習内容の中心に据えた Oral Approach（イギリス）、Audio-lingual Method（アメリカ）が普及した。しかし1950年代後半になると、行動主義心理学の立場を否定する言語理論がアメリカの言語学者 Noam Chomsky によって提案され、それまでの教授法は次第に姿を消すことになった。言語の知識は生得的なものであるという立場から人間が生まれながらに持っている普遍文法を解明する方向へ研究の中心が移っていった。しかし、言語の習得をパラメータの設定で説明しようとする普遍文法の考えは、英語教育に大きく貢献することはなかった。1970年代に入るとコミュニケーションの習得に焦点を当てた Communicative Approach が主流となり現在に至った。新学習指導要領もこのアプローチに基づいている。

さて言語学の分野でも普遍文法一辺倒の流れに異を唱える研究者が現れてきた。もともと意味論に関心を持っていた研究者が、ことばの機能的側面、発話行為的側面、比喩的側面に焦点を当てた研究を進めるうちに、ことばと認識の問題に注目するようになった。そうした中で、アメリカの言語学者 Langacker を中心に認知文法という新たな研究分野が開拓され、ことばと認識の関係に光が当てられるようになった。今回の講座の後半は、この分野の知見をもとに構成されている。それでは「知識スキーマ」から考察していこう。

3. 英語は世界語

3-1. 世界人口¹⁾

まず最初に世界人口の推移を考察してみよう。1950年に25億であった人口は、わずか50年後の2002年には62億にまで膨れ上がった。1850年に12億であった世界人口が100年かけて倍増したのに比べ、1950年以降はその半分の50年で2倍以上に伸びたことになる。産業革命以降イギリスを宗主国としてアジア・アフリカに英語圏が生まれ、第2言語・公用語として英語が普及していった。第二次世界大戦後は、アメリカ合衆国が世界経済をリードし英語を世界的に普及させることになった。英語は世界人口の爆発的な増加と、アメリカ経済の台頭に後押しされながら世界へと普及していったのである。

3-2. 世界の言語人口²⁾

次に母語話者の数を比較しながら、英語が世界的にどの位置にあるのか考えてみよう。言語人口の統計によると、トップ10は次のようになる。

	言語名	使用人口
1.	中国語	10 億
2.	英語	3.5 億
3.	スペイン語	2.5 億
4.	ヒンディー語	2 億
5.	アラビア語	1.5 億
	ベンガル語	1.5 億
	ロシア語	1.5 億
8.	ポルトガル語	1.35億
9.	日本語	1.2 億
10.	ドイツ語	1 億

英語の母語話者は3億5千万人と第2位である。これに対して中国語の母語

話者は10億人（1987年現在）と圧倒的に多い。ただ、中国語は北京語・上海語・広東語・福建語などからなり、文法構造・発音等が異なるため1つの言語として捉えるのは難しい。英語の場合も、アメリカ英語・イギリス英語・オーストラリア英語等に区分することが可能であるが、意志の疎通ができないということはない。

3-3. 英語の3区分³⁾

英語がどのように使用されているかによって、3つのグループに分かれる。第1グループは母語としての英語である。イギリス・アメリカ合衆国・カナダ・アイルランド・ニュージーランド・南アフリカ等で使用されている。南アフリカは17世紀半ばにオランダの植民地となったが、19世紀初めにイギリスからの移住者が増え、英語が部分的に使用されるようになった。現在では英語は360万人程度の母語として使用されているようである。国民の大半はオランダ語から発達したアフリカーンス語を使用している。統計によると第1グループの英語使用人口は、3億2千万～8千万人と見積もられている。

第2グループは、第2言語または公用語としての英語である。インド・シンガポール・フィリピン等のアジア地域、そしてガーナ・ナイジェリア等のアフリカ地域で使用されている。これらの地域では複数の言語が使われており、政治・法律・教育・医療といった公的な分野で共通語として英語を使用している。数え方によってかなり異なるが、このグループの使用人口は1億5千万から3億人と考えられている。

第3グループは、外国語としての英語である。英語が世界語としての地位を得て、政治・経済・科学等の多くの分野で使われるようになった。日本をはじめ中国・ロシア・ドイツ・エジプト等では最も重要な外国語として英語が教えられている。統計的には、1億から10億に近い人々が英語を学習し使用していると言われている。ただ、どの程度の英語力をもって使用者とするかについて基準がなく、使用人口にかなり隔たりがでている。

第2グループでは、英語以外の言語を母語として使用しているため、発音・

イントネーションが英語母語話者のそれとはかなり異なっている。例えば、多民族からなるシンガポールでは、中国語・マレー語・タミール語が母語として使われており、どの言語が母語であるかによって話される英語の発音がかなり異なる。公用語として英語が社会に内在化しているため、独自の発音・イントネーションが発達したと考えられる。こうした英語を耳にする機会がない日本人にとっては、かなり難解に聞こえるかもしれない。これに対して第3グループの英語は、使用者の多くがイギリス英語ないしアメリカ英語をモデルにして教育機関で英語を学習しているため、第2グループほど顕著な特徴が見られない。

3-4. イギリス英語とアメリカ英語

ここでは母語としての英語、特にイギリス英語とアメリカ英語の違いについて考察していこう。まず発音について考えてみよう。一口にイギリス英語といっても地域や社会階層によって発音やイントネーションがかなり異なる。そこで Received Pronunciation (RP) といわれる容認発音を取り上げることにする。これは別名 public school accent・BBC English accent と呼ばれ、日本人の英語学習者にとってモデルとなりうる英語である。またアメリカ英語も北部・中部・南部の3方言区分に分かれるが、ここではテレビのニュースキャスターが使う中部英語(別名 Network English)を取り上げる。具体例を見てみよう。

- (1) a. dance, ask, glass, class, castle
- b. garden, partle, parkle
- c. city, water, better, gentleman

(1 a) については、アメリカ英語が/æ/と発音するのに対し、イギリス英語は/ɑ:/と発音するため、かなり違った音に聞こえる。(1 b) は、イギリス英語が一般的に/r/を発音しないのに対して、アメリカ英語は発音する点

が異なる。また (1c) は、イギリス英語が /t/ 音をはっきり発音するのに対して、アメリカ英語では /t/ が強母音と弱母音にはさまれたとき tap という現象が起こり明瞭に発音されなくなる。

日本の英語教育は、戦後アメリカ英語の影響を強く受けるようになり、テキストの CD の多くがアメリカ人によって録音されてきた。Oxford・Cambridge・Longman などのイギリスの出版社は、イギリス英語版とアメリカ英語版に分けてテキストを出版している。ただ、世界語としての英語を意識してか、最近は色々な種類の英語が CD に録音されるようになり、この傾向は今後さらに加速するものと思われる。

次に語彙の違いについて考察しよう。発音同様に語彙においてもイギリス英語・アメリカ英語の違いが見られる。

- (2) a. I am a freshman at New York University.
b. I am majoring in English.
c. Watch your step.
d. One way or round trip?
e. Have you made a reservation for a hotel?

(2) で下線が付された語彙・語句は日本人学習者によく知られたものであるが、主にアメリカで使われている表現である。イギリスでは下記のような言い方が普通であろう。

- (3) a. I am a first-year student at Oxford University.
b. I am reading English.
c. Mind your step.
d. Single or return?
e. Have you booked a hotel?

教員研修の経験から言うと、正答が得られたのは(3c)と(3e)で、他は適切な答えが得られなかった。特に(3b)は日本人には想像しがたい表現であろう。(3a)は、日本語の言い方に従えばイギリス英語表現になるのだが、アメリカ英語に慣れているせいかほとんど正答が得られなかった。また(3d)では“return”の代わりに“double”という答えが返ってきた。ホテルの部屋には“single”に対して“double”が使われるため、このような答が出てきたのであろう。さらに例をあげてみよう。

	イギリス英語	アメリカ英語
(4) a.	toilet	bathroom
b.	underground	subway
c.	film	movie
d.	flat	apartment
e.	pavement	sidewalk
f.	trousers	pants
g.	bit	little
h.	cashpoint	ATM
i.	sweets	candy
j.	petrol	gasoline

日本人学習者に馴染みがあるのは、やはりアメリカ英語である。(4)の語彙は、教員研修ではほとんど正答が得られたが、同じ問題を高校生に出題したところ期待したほど正答が得られなかった。教員は長い英語学習から、イギリス英語とアメリカ英語を区別することができたと思われる。高校生の正答率の低さは、社会的な観点から英語が教えられていないことを表している。

最後に文法の観点からイギリス英語とアメリカ英語の違いを考察してみよう。

- (5) a. He's just gone home.
b. He just went home.
- (6) a. Have you got a problem?
b. Do you have a problem?
- (7) a. I've never really got to know him.
b. I've never really gotten to know him.
- (8) a. It's important that he should be told.
b. It's important that he be told.
- (9) a. "Hello, is that Harold?"
b. "Hello, is this Harold?"

(5)～(9)の例では、(a)がイギリス英語で(b)がアメリカ英語である。(5)の例は、発話時の直前に起こった出来事を表しているが、イギリス英語では現在完了形を使うのが一般的であるのに対し、アメリカ英語では過去形を使うことが多い。(6)はよく知られている用法であるが、イギリス英語では所有を表す“have”の代わりに“have got”を用いる。(9)は電話の表現で、イギリス英語では話し手自身を“this”、聞き手を“that”で表現するのに対し、アメリカ英語では話し手も聞き手も“this”で表す。やや問題なのが例文(7)と(8)である。一般的に文法書では(a)をイギリス英語として紹介しているが、イギリス人によっても判断が分かれるようである。あくまでも一般的な傾向として両者を区別すべきで、イギリス英語とアメリカ英語が二項対立的に区分されるわけではない。

これまで現代英語を取り巻く要因に焦点を当て、使用される地域でどのような違いがあるか概観してきた。教員研修では筆者がBBCテレビから収録

したビデオをもとに、英語の3グループの発音・イントネーションの違いを確認した。教員の多くは違いの大きさに驚いたようであった。授業で教えている英語を捉え直す意味で、役に立ったのではなかろうか。

4. ことばと認識

4-1. 前置詞

本節では「言語スキーマ」に焦点を当て、母語話者がどのような知識を持っているかについて考察する。まず前置詞を通して事象解釈にどのような違いがあるか考えてみよう。

(10) a. We walked across the square to the cafe.

b. I walked through the crowd to the bar.

(11) a. If you don't stop shouting at me, I'll come and hit you.

b. Mary shouted to us to come in and swim.

英語教師であれば直感的に (10a) が “across”, (10b) が “through” であることが分かる。問題はなぜそうなのかということである。日本語の「通って」という表現は両者に使えるので、日本語から答えを推定することはできない。ここでは移動を二次元的に捉えるか、三次元的に捉えるかという現実認識の違いが重要な役割を果たしている。人集りの中を通って前に進む場合は、事象解釈が三次元的であるのに対し、公園や広場を通過する場合は経路を二次元的に捉える傾向がある。“Across” は二次元的な解釈を反映し、“through” は三次元的な解釈を反映している。

例文 (11) の前置詞の選択は、動詞 “shout” の意味内容と関連している。(11a) は「どなりつける」という意味で、前置詞の後に来る名詞が行為の目標となるため、点を表す “at” が用いられる。これに対して (11b) は「大

きな声で言った」という意味で, “speak” “tell” “say” などと同じ伝達動詞と考えられ, 方向を表す “to” が使われる。

もう1つ例を見てみよう。(12) はドアのどこに焦点を当てるかによって, 2通りの言い方が可能であることを表している。

(12) a. Someone is knocking on the door.

b. Someone is knocking at the door.

すなわち, ノックされるドアそのものに焦点を当てれば(12a)のように“on”が用いられ, ドアのある場所に焦点を当てると(12b)のように“at”が用いられるのである。

4-2. ことばの多面性

次にことばの持つ多面性を取り上げてみよう。ことばはシンボルと呼ばれる記号の一種である。記号にはこれ以外にも, インデックス・アイコンと呼ばれるものがある。インデックスは何かを指し示す働きを持ち, 指すものと指されるものとの間に近接関係が成り立つ。矢印がその代表である。一方, アイコンは両者が類似関係で結ばれ, パソコンの画面や標識に好んで使われている。

ことばがシンボルであることはすでに指摘したが, シンボリックなことばの中にインデックス的な要素・アイコン的な要素が内在している。インデックスの例としては, ダイクシスと呼ばれる指示表現が代表的なもので, 英語では “this” “that” がそれにあたる。また “here” “there” などの場所表現, “yesterday” “today” “tomorrow” などの時間表現もこの範疇に属する。重要なのは, 起点 (指示するもの) と目標 (指示されるもの) が話し手・聞き手の双方で理解されなければならないということである。張り紙に次の文が書かれていた場合, (13b) は意味をなさない文となる。

- (13) a. English class. Tomorrow at ten. Meet here!
b. *English class. Tomorrow at ten. Meet there!

(13) で問題となるのは、時間表現 “tomorrow” と場所表現 “here” “there” である。“Tomorrow” の場合は、発話時が起点でその翌日が目標となる。張り紙が掲示された日と、張り紙を見た日が一致する場合は「明日」の意味を正しく理解したことになるが、そうでない場合は間違った解釈になる。場所表現の “here” “there” では、“here” のみが意味をなし “there” は不的確となる。これは “here” が同一指標を起点と目標にとるのに対し、“there” は起点と目標が異なるからである。“There” がどこを指しているか分からない以上、(13b) は意味不明な表現となる。

起点と目標が解釈に必要な表現は他にも見られる。次の例は同じ事象を表しているにもかかわらず、前置詞によって表現の仕方が異なる。

- (14) a. The alarm button is just above the light switch.
b. The light switch is just below the alarm button.

前置詞 “above” は下に位置するものを参照点（目的語）にとり、“below” は上に位置するものを参照点にとる。従って両者の違いはどちらを参照点にとるかであり、それ以外に異なる点はない。ところが比較されるものによっては、一方の語順しか許されない場合がある。

- (15) a. The bicycle is next to the church.
b. ?*The church is next to the bicycle.

(15) では、比較されるもののサイズや性質が (14) と異なっている。「自転車」と「教会」を比べると、前者は小さくまた移動が可能であるのに対し、後者は大きく移動できないものである。一般的に参照点になるのは後者であ

るので、(15b) は不自然な文となる。

次にアイコニックな関係について考えてみよう。(16) は語順と事象の成立順序に類似性があることを示している。一般的に、先に起こった事象から述べていくという統語規則が働いている。

- (16) a. now and then, sooner or later, day and night, cause and effect
b. hit and run, give and take, wait and see

同じような関係は、慣用表現以外にも見られる。

- (17) a. Virginia got married and had a baby.
b. Virginia had a baby and got married.

- (18) a. Bill painted the green door.
b. Bill painted the door green.

(17) は「結婚する」ことと「子どもができる」ことの2つの事象が異なる語順で表現されている。この場合は、時間的な成立順序の違いを表すだけでなく、社会的な価値の違いも絡んでくる。(18a) では「緑のドア」がペンキを塗る対象として捉えられているが、結果として何色になったのかは言及されていない。一方(18b) では、「ドア」と「緑色」が独立した句をなしており、「ドア」にペンキを塗った結果「緑色」になったことを表している。

ことばと事象のアイコニックな関係は時間関係に留まらず、動詞と目的語の繋がりの強さにも見られる。

- (19) a. I made her leave.
b. I wanted her to leave.
c. I hoped that she would leave.

(19)では、「彼女が出ていく」という事態が裸の不定詞(19a),to不定詞(19b),that節(19c)で表現されている。(19a)から(19c)に進むにつれ,動作主のかかわる度合いが弱くなっていく。主動詞と動詞“leave”との統語的な距離が,動作主の関わりの強さを示しているのである。これは関係の強いものほど接近して存在するという世界認識が,統語レベルで反映されたものと思われる。

この視点から考察すると,次の例の意味の違いを説明することができる。

(20) a. John sent his girlfriend a valentine card.

b. John sent a valentine card to his girlfriend.

(20a)では受取人が二重目的語構文の間接目的語として表現されているのに対し,(20b)では前置詞句内に位置して動詞“send”から独立している。一般的に,二重目的語構文と与格構文は交換可能と考えられているが,完全に等価でないことは次の例から明らかである。

(21) a. John gave Mary a kiss.

b. *John gave a kiss to Mary.

(21)は,軽動詞構文と呼ばれる特殊な用法である。中心的な意味は目的語の名詞が担い,“give”は補助的な役割を果たすだけである。この場合,「キス」がJohnからMaryに移動したという意味でなく,「キス」という行為が生じたことを表している。行為の発生を表す文に二重目的語構文が用いられるのは,間接目的語が受益者の役割を担うためである。また,“to”前置詞句が使われないのは,受益性が薄められ方向性に焦点が当たるからである。その結果,行為が完全に成立した可能性が弱められてしまうことになる。

(20)の場合,一般的にどちらの構文を使ってもかまわないが,相手にカードが届いていない状況では(20b)しか使えないことになる。

4-3. 未来表現

次に日本人学習者が最も苦手とする未来表現を考えてみよう。英語には以下に続く5種類の未来表現があり、日本語の表現と大きく異なっている。

- (22) a. We will leave Fukuoka tomorrow.
b. We are going to leave Fukuoka tomorrow.
c. We are leaving Fukuoka tomorrow.
d. We leave Fukuoka tomorrow.
e. We will be leaving Fukuoka tomorrow.

未来表現は日常生活の中で重要な表現形式でありながら、今ひとつ正確に理解されていない。これは、日本語では「～する」「～しよう」といった表現でほぼ事足りるのに対して、英語は未来事象を細かく分類しているからであろう。

まず“will”が使われた(22a)は、主語の意図・判断を表す。発話時において、出発する日程を「明日」に決定したという意味である。結婚式の誓いの言葉に“I will.”が使われるのは、まさにこの所以であろう。電話が鳴ったり、来客がドアのベルを鳴らしたりしたとき、「私がでます」というとっさの判断に“will”が使われる。

これに対して“be going to”が使われた(22b)は、主語の既決の意図を表す。既に意志決定をして、未来の事象の成就に向かって進んでいることを表わしている。既決の意図という点で、発話時の意図・判断を表す“will”と異なっている。ここで重要なのは、“going”が本来の空間移動から、時間移動に写像されているという点である。空間移動を表す動詞が、時間移動の表現に転移することは珍しいことではない。次の例では、動詞“come”が時間表現として使われている。

(23) a. Christmas is coming soon.

b. The time has come to act.

本来“come”という動詞は、主語で表される名詞が話し手のいる場所へ移動することを表す。従って、話し手は一般的には静止しており移動の目的地になる。ところが、この関係が逆転して話し手が移動し、主語が目的地の役割を果たす場合もある。車で移動しながら「目的地が近づいて来た」という表現がそれである。ことばの表現は、話し手の主観的な事象解釈を反映するため、このような逆転が認知的に許されるのである。そして、こうした空間認識が更に時間スペースに写像したものが(23)と考えられる。(22)の場合は、未来に成就する事象に向かって話し手が移動しているので“come”ではなく“go”が使われている。

それでは現在進行形が表す未来表現(22c)はどうであろうか。この表現は、未来事象の実現に向けた取り決め・段取りがなされている場合に使用される。従って、実現する確率が高い印象を聞き手に与えるのである。(22)で言うと、荷物の準備や交通手段の確認が済んでいる場合に適した言い方である。現在進行形は、もともと発話時に進行している事態(on-going events)を表す用法である。未来事象に用いられた場合、話し手はその事象があたかも発話時に実現しているかのように捉えていると考えられる。

現在形が使われた(22d)は、確実に成就する未来の出来事を表し、個人的な予定というより組織的な計画という印象を聞き手に与える。旅行の場合は、変更が難しい団体旅行の日程に対して使われるであろう。最後に“will”+進行形が使われた(22e)は、個人的な意図とは関係なく、予定されている出来事を表す。この用法の理解には、次の会話の方が分かりやすいであろう。

(24) A: “I need to return this book to Jane.”

B: “I will return it for you. I will be meeting her at school tomorrow.”

この場合、BがJaneと前もって会う約束をしていたわけでもなく、また本の返却のためにわざわざ会うように都合をつけたわけでもない。同じ授業を受講しているなどの理由から「会う」と言っているのである。このような場合なら、Aは気兼ねなく本の返却をBに頼むことができるであろう。

これまで未来用法について概観してきたが、上で触れなかった推測表現について簡単に説明しておこう。

- (25) a. You will be in time if you hurry.
b. Don't call me tonight. I will be studying for the exam tomorrow.
c. Look at the clouds. It is going to rain soon.

(25a)は、(22a)と異なり推測を表す。条件文の主節に“will”が表れやすいのは、この理由からである。(25b)は形式的には(22e)と同じであるが、未来のある時点において進行している出来事を表す。(25c)のように“be going to”が推測の意味で用いられた場合は、発話時に何か根拠のある推測を表している。推測を表す未来表現も、英語学習者に正しく理解されているわけではなく、(26a)と言うべき所を(26b)のように表現する学習者が多い。

- (26) a. She is going to have a baby next August.
b. She will have a baby next August.

主語が妊娠している場合は(26a)のように“be going to”を用いるのが一般的で、“will”を用いると話し手の勝手な推測または予言といった不自然な意味になる。

このように英語の未来表現は、日本語とかなり異なる事象解釈が反映している。学習指導においては、話し手が未来の事象をどのように捉えているかということを理解させる必要がある。

4-4. 丁寧さと間接性

本稿の最後に丁寧さと間接性の関係について若干述べておきたい。日本語には丁寧体・尊敬語・謙譲語などがあるが、英語にはこれにあたる表現が形態的に存在しない。これは英語に丁寧表現がないという意味ではない。具体例を見ながら考察していこう。

- (27) a. Close the window.
b. Close the window, please.
c. Will you close the window?
d. Would you close the window?
e. Let's close the window, shall we?

上の例では、同じ命題内容が異なる表現形式で述べられている。音声的な側面を除けば、(27a) から (27d) に進むにつれてより丁寧な言い方となる。視覚的に分かることは、丁寧な表現になるにつれて文が長くなるということである。(27a-b) は命令文で、話し手の意向が命令として聞き手に伝えられている。これに対して (27c-d) では、聞き手の意図に訴えているところが命令文と異なる。さらに (27d) では法助動詞 “will” の過去形 “would” が用いられ、仮定法的な表現となっている。(27e) が他の表現と異なるのは、聞き手に求める行為でありながら、その行為の参与者に話し手自身も含めている点である。

以上から丁寧表現の要素として、過去時制を使う、話し手自身を含んだ行為であるかのように見せかけるといった点が指摘される。こうした丁寧表現に共通するのは、間接性という観点である。過去時制を使うのは、要求が現在のことではなく過去の事柄であるように見せかけるため、要求と聞き手の間に心理的な距離が生じる。また、命じる対象に聞き手だけでなく話し手も含めるのは、聞き手への威圧感を抑えるためである。以上のことは、名詞についても同じである。「便所」という直接的な表現を避けて、「お手洗い」「化

粧室」などというのは、本来の場所から遠のくことにより機能的・空間的な間接性が高まるためである。また「トイレ」という外来語を使うのは日本語から外国語へと移行することで間接性が強くなるためである。丁寧さの裏に潜む間接性に焦点を当てると、一件複雑に見える用法の謎が解けてくるのではなかろうか。

5. まとめ

本稿は「英語教員研修」の「English Communication Grammar」で扱った内容をまとめたものである。新学習指導要領でも「実践的コミュニケーション能力を養う」ことが外国語の目標として掲げられた。筆者は英語学習に必要な要素として、「知識スキーマ」と「言語スキーマ」の2つに注目した。人間は知識を無秩序に取り入れているのではなく、体系的なスキーマとして所有しているという考えが前提になっている。前者は百科辞典的で無限大であるが、ここでは世界語となった英語がどのように使われているかに焦点を当て、発音・語彙・文法がイギリス英語とアメリカ英語でどのように異なるかを考察した。また、後者については英語母語話者が世界をどのように捉えているのか、認知的な側面に焦点を当て表現の違いを説明した。本稿で扱った内容は、それぞれの専門分野では一般的に知られていることであるが、中学高校の現場で教える教師にはあまり知られていない情報である。少なくとも研修を通じた筆者の経験からいえば、新しい視点であったように思われた。コミュニカティブ・アプローチが導入されて暫くたつが、改善効果が上がっているかどうかの判断にはもう少し時間が必要であろう。ただ、コミュニカティブと言われるわりに、具体的な教育方法について議論が十分されていないのが気になるところである。スキーマ的な視点、認知的な視点の教育アプローチは、学習者に有益な効果をもたらすであろうと考えている。

(資料 1) 山口県英語教員指導力向上研修

Introduction

Knowledge of English: Two schemas

Language schema

Knowledge schema

Part I. Knowledge schema

1. World population

1950 年 _____ 億人 → 2002 年 _____ 億人

2. Language population / Top 10

Chinese, English, German, Hindi, Japanese, Portuguese, Spanish

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. _____ 億人 | 5. Bengali _____ 億人 |
| 2. _____ 億人 | 5. Russian _____ 億人 |
| 3. _____ 億人 | 8. _____ 億人 |
| 4. _____ 億人 | 9. _____ 億人 |
| 5. Arabic _____ 億人 | 10. _____ 億人 |

3. Groups of English

Group A: English as a first language (第 1 言語)

USA, UK, _____, _____, _____, _____,

Group B: English as a second language / official language (第 2 言語)

行政・放送・教育 (Administration, broadcasting, education) などの分野で使用

India, _____, _____, _____,

Group C: English as a foreign language (外国語)

Japan, _____, _____, _____, (over 100 countries)

- | | | | |
|----------------|---------------|-------------|-------------|
| ① Canada | ② China | ③ Germany | ④ Ghana |
| ⑤ Holland | ⑥ New Zealand | ⑦ Nigeria | ⑧ Singapore |
| ⑨ South Africa | ⑩ Ireland | ⑪ Australia | |

4. British or American English? / Sound 「異なる英語の発音」

1. dance, ask, glass, class, castle
2. garden, part, park
3. city, water, better, gentleman

5. British or American English? / Words 「異なる英語の語彙」

The following words are used mainly in USA. What words are used in UK?

- (1) I am a freshman at New York University. _____
- (2) I am majoring in English. _____
- (3) Watch your step. _____
- (4) One way or round trip? _____
- (5) Have you made a reservation for a hotel? _____

British or American English? Put BE for British usages and AE for American usages.

- | | |
|-----------------|-----------|
| (6) bathroom | toilet |
| (7) underground | subway |
| (8) film | movie |
| (9) apartment | flat |
| (10) sidewalk | pavement |
| (11) trousers | pants |
| (12) a bit | a little |
| (13) ATM | cashpoint |
| (14) candy | sweets |
| (15) petrol | gasoline |

6. British or American English? / Grammar 「異なる英語の文法」

- (16) a. He just went home.
b. He's just gone home.
- (17) a. Have you got a problem?
b. Do you have a problem?
- (18) a. I've never really gotten to know him.
b. I've never really got to know him.
- (19) a. It's important that he be told.
b. It's important that he should be told.
- (20) a. Hello, is that Harold? (on the telephone)
b. Hello, is this Harold? (on the telephone)

Part II: Language schema

1. Warm-up

across / through

- (1) a. We walked (across / through) the square to the café.
b. I walked (across / through) the crowd to the bar.

at / to

- (2) a. If you don't stop shouting (at / to) me, I'll come and hit you.
b. Mary shouted (at / to) us to come in and swim.

see, watch, hear

- (3) a. I saw her crossing the road.
b. I saw her cross the road.

2. Symbol, Index and Icon 「シンボル・インデックス・アイコン」

A. Index (指示) : contiguity (近接性)

Space: here / there, over here / over there, this / that, etc.

Time: then / now / then, yesterday / today / tomorrow, etc.

Person: I / you / she / he / they, etc.

Verb: come / go, bring / take, etc.

- (4) a. English class tomorrow at ten: meet here!
b. English class tomorrow at ten: meet there!
- (5) a. The alarm button is just above the light switch.
b. The light switch is just below the alarm button.
- (6) a. The bicycle is next to the church.
b. ?*The church is next to the bicycle.

B. Icon (アイコン) : similarity (類似性)

now and then, sooner or later, day and night, etc.

cause and effect, hit and run, give and take, wait and see, etc.

- (7) a. $2 + 3 = 5$
b. $3 + 2 = 5$
- (8) a. Virginia got married and had a baby.
b. Virginia had a baby and got married.
- (9) a. Bill painted the green door.
b. Bill painted the door green.
- (10) a. Romeo sent his girlfriend a valentine card. (send + sb + sth)
b. Romeo sent a valentine card to his girlfriend. (send + sth + to sb)

- (11) a. I made her leave.
b. I wanted her to leave.
c. I hoped that she would leave.
- (12) a. I want you to have a good time while you're staying with us.
b. I hope you have a good time in Ireland.
- (13) a. I know Madonna.
b. I know of Madonna.
- (14) a. I shot him.
b. I shot at him.

3. Future expressions

- (15) a. We leave Yamaguchi tomorrow.
b. We will leave Yamaguchi tomorrow.
c. We are going to leave Yamaguchi tomorrow.
d. We are leaving Yamaguchi tomorrow.
e. We will be leaving Yamaguchi tomorrow.
- (16) a. She will have a baby next year.
b. She is going to have a baby next year.
- (17) a. If you accept that job, you will regret it.
b. *If you accept that job, you are going to regret it.
c. If we go on like this, we 're going to find ourselves in difficulty.
- (18) a. If you are alone at Christmas, let us know about it.
b. If you will be alone at Christmas, let us know about it.
- (19) a. It will rain tomorrow.
b. It is going to rain tomorrow.
c. *It is raining tomorrow.
- (20) A: I need to go to the library today.
B: OK, I'll drive you there.
A: Thank you, but I don't want to bother you.
- (21) A: I need to go to the library today.
B: Oh, I'll be going there to return my books. Why don't you come with me?
A: Really? That will be great.

4. Conversation and Politeness 「会話と丁寧さ」

- A. The cooperative principle 「会話における協調の原理」
Maxim of Quality 「質の原則」: Be true.

Maxim of Quantity 「量の原則」 : Be as informative as is required.

Maxim of Relevance 「関係の原則」 : Be relevant.

Maxim of Manner 「様態の原則」 : Be perspicuous (clear).

- (22) A: 'Do you happen to know who won yesterday?' (B does not know.)
B: 'No, I don't.'
B': *'Chelsea did.'
- (23) A: 'Do you know where the nearest petrol station is?'
B: 'There is a petrol station around the corner, but it is closed on Sunday. The next one is 5 miles ahead.'
B': *'There is a petrol station round the corner.'
- (24) A: 'Did Tony Blair win the election?'
B: 'The paper is on the table.'

B. Conversational implicatures 「会話の含意」

- (25) (wife to husband) You left the door of the fridge open.
- (26) A: 'How do you like my new hairstyle?' (A and B are working now.)
B: 'Let's get going.'
B': 'I like it a lot.' (lie)
B'': 'I think it looks awful.' (painful result)

Discussion ➡

- (27) A: 'Thank you very much. Would you like some coffee or something?'
B: 'I'm married.'
- (28) A: 'Would you like to dance?'
B: 'Sure. Do you know anyone else who'd like to?'

C. Politeness 「丁寧さ」

- (29) A: 'It's my birthday tomorrow. Are you coming to my party?'
B: 'Well, I'd like to come, but actually I've got rather a lot of work to finish for the next day.'

Discussion ➡

- (30) a. (I hope / I'm hoping) you'll give us some advice.
b. (I hope / I'm hoping) you'll come and have dinner with us.
- (31) a. Do you want me?
b. Did you want me?
- (32) Make sentences to ask somebody to shut the door.

1. _____
2. _____
3. _____

4. _____
5. _____

References 「参考文献」

- 『日本人の英語』 マーク・ピーターセン 岩波新書 18 (1988 年)
『続日本人の英語』 マーク・ピーターセン 岩波新書 139 (1990 年)
『心にとどく英語』 マーク・ピーターセン 岩波新書 604 (1999 年)
『コミュニケーション英語学』 マーク・ピーターセン 集英社インターナショナル (2002 年)

- Vocabulary in Use. Intermediate.* S. Redman & E. Shaw. Cambridge University Press. (1999)
Basic English Usage. Michael Swan. Oxford University Press (1984)
Practical English Usage. Michael Swan. Oxford University Press (1995)
Longman Dictionary of Common Errors. N. D. Turton & J. B. Heaton. Longman (1996)
Oxford Advanced Learner's Dictionary. Oxford University Press. The 6th edition. (2000)

(資料2) **World English** (ビデオ)

English as a first language (母国語としての英語)

British English:

- 0:00-1:48 1. Tony Blair, British Prime Minister
- 1:49-2:50 2. Nik Gowing, BBC World newsreader

American English:

- 2:51-3:18 3. Colin Powell, US Secretary of State
- 3:19-4:23 4. Bill Clinton, Former US president
- 4:24-4:48 5. Howard Smith, Virginia Spotsylvania County Police

English as a second language / official language (第2言語および公用語としての英語)

Singapore: (English, Chinese, Malay, Tamil)

- 4:49-5:16 6. BBC World newsreader
- 5:17-5:40 7. BBC World newsreader
- 5:41-6:55 8. Victor Li, Fortune Teller
- 6:56-7:12 9. Mustapa Othman, Executive Director Travel Ways
- 7:13-7:40 10. BBC news correspondent

India:

- 7:41-8:37 11. Karnal Singh, Deputy Inspector, Goa Police
- 8:37-10:02 12. Altaf Hussain, BBC news correspondent

English as a foreign language (外国語としての英語)

Kuwait:

- 10:03-10:34 13. Mohammed Al Sabah, Kuwait Foreign Affairs Minister

Finland:

- 10:35-11:13 14. Paavo Lipponen, Finnish Prime Minister

Indonesia:

- 11:14-11:40 15. Hasim Muzzasi, Chairman Nahdlatul Ulama

Iraq:

- 11:41-12:12 16. Tariq Aziz, Iraqi Deputy Prime Minister

Holland:

- 12:13-12:30 17. NHK BS

* 本稿は山口県教育委員会の依頼を受け、2003年夏に実施した「山口県英語教員指導力向上研修」で扱った内容をまとめたものである。参加された中学・高等学校の先生方に感謝の意を表したい。日程その他詳細については下記の通りである。

主催：山口県教育委員会、場所：カリエンテ山口、日程及び対象：2003/7/29 (火)・30(水) 中学校英語教員77名、2003/8/19(火)・20(水) 高校英語教員56名

- 1) 世界の人口統計は Reader's Digest 版 *Atlas of the World* を参考にした。
- 2) 世界の言語人口は David Crystal (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language* の記述に基づく。
- 3) それぞれのグループの使用人口は David Crystal (1997) *English as a Global Language* を参考にした。

参考文献

和 書

『「英語が使える日本人」の育成のための英語教員研修ガイドブック』(2003) 文部科学省

洋 書

Crystal, David. (1988) *The English Language*. Penguin Books

Crystal, David. (1995) *The Cambridge Encyclopedia of The English Language*. Cambridge University Press

Crystal, David. (1997) *English as a Global Language*. Cambridge University Press

Dirven, Rene and M. Verspoor (1998) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. John Benjamins Publishing Company

Jenkins, Jennifer (2003) *World Englishes A Resource Book for Students*. Routledge

Lee, David. (2001) *Cognitive Linguistics An Introduction*. Oxford University Press

Leech, Geoffrey. (1987) *Meaning and the English Verb*. 2nd edition. Longman

McCrum, Robert. W. Cran, and R. MacNeil. (1986) *The Story of English*. BBC Books

Tomasello, Michael. ed. (1998) *The New Psychology of Language*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers